

# 接続助詞「うちに」の認知言語学的考察

松 中 義 大

基礎教育課程

## Cognitive Linguistic Analysis of Japanese Conjunctive Particle *uchini*

MATSUNAKA Yoshihiro

*Division of Liberal Arts and Science*

(Received November 13, 2000 ; Accepted January 19, 2001)

### 1. はじめに

本稿では、(1)に挙げるような接続助詞「うちに」を用いて、2つの節を結びつけた構文におけるその接続助詞の持つ意味を認知言語学的視点から解明することを試みる。

- (1) 子供が寝ているうちに、洗濯を済ませた。

この文では、「子供が寝ている」という event (事態) と、「洗濯を済ませた」という event が接続助詞「うちに」によって結合され、2つの event 間の時間的関係を示している。つまり、「子供が寝ている」という出来事の発生している時間内に「洗濯する」という行為を完了させた、という解釈である。ところが、この接続助詞「うちに」を構成している要素である「うち」は、(2)、(3)の文例が示すように、本来は空間における位置関係を示すものである。

- (2) 城の内に隠れる。  
(3) 大宮の内にも外にも光るまで (万葉集17)

さらに、この空間的な意味からの派生として(4)のような表現も見られるが、空間の意味は保持されている。

- (4) 心の内に思いを秘める

このような空間の意味での「うち」が何故接続助詞「うちに」に見られるような時間の意味で用いられるようになったのであろうか。本稿では、この問いに対する解答を認知言語学的視点から探っていくこととする。

次節では接続助詞「うちに」に関する過去の研究を概観する。第3節では、本稿の研究の基盤となる認知言語学の、とりわけメタファー研究の視点を取り上げ、「うちに」を空間から時間への写像と捉えて説明を試み、それに基づいて「うちに」の文例の類型化を試みる。

### 2. 先行研究

「うちに」に関する先行研究のいくつかを概観することにし、まずそれらについて私見を挟まずに紹介する。それに対しての問題点を本節の最後で指摘する。

#### 2.1 浅野 (1975)<sup>1</sup>

浅野 (1975) では、「S (=Sentence)<sub>1</sub>うちに S<sub>2</sub>」の特徴として、第1に S<sub>2</sub>は S<sub>1</sub>の時間の中に包含される、言い換えれば、S<sub>2</sub>は S<sub>1</sub>より遅れて起こり、S<sub>1</sub>より早く終わるといふように定義づけている。これはこの接続助詞の本来の「うち」という表現が、「このうちから、お好きなものをお取り下さい」や、「10人のうち、2人欠席している」などの例文に見られるように、全体ではなく、その一部分を表す、という意義特徴を持ち、それが接続助詞にも生きている、と主張している。また、第2に、S<sub>1</sub>の時間の経過・進行が S<sub>2</sub>の発生・成立の要因になっている、つまり両者の間に何らかの因果関係が成立する、という点である。浅野はこの因果関係のあり方に着目し、「うちに」をさらに下位分類して検討を進めている。その下位分類は以下の通りである。

- (1) 並行型—(a) 行為的因果関係  
(b) 時間的因果関係  
(2) 遮断型—(a) 行為的因果関係  
(b) 時間的因果関係  
(3) 制約型

以下にそれぞれの分類を概観する。

(1) 並行型—S<sub>1</sub>の時間の進行と並行して S<sub>2</sub>の状態も変化する場合さらに、これを2つに分類して、

(a) 行為的因果関係

S<sub>1</sub>における行為の継続が S<sub>2</sub>をもたらず場合

(5) 東京に住んでいるうちに、大阪弁を忘れてしまった。

(6) 毎日学校に通っているうちに、田中さんと親しくなった。

これらの例文では  $S_1$  の行為が原因となって (東京に住んでいるために、毎日学校に通っているために=毎日学校で田中さんと会っているために)、 $S_2$  の状態が惹起された (大阪弁を忘れてしまった、田中さんと親しくなった) と考える。

#### (b) 時間的因果関係

$S_1$  の行為の時間の経過・継続が  $S_2$  をもたらす場合。

(7) 話し込んでいるうちに、暗くなってきた。

(8) 立ち話をしているうちに、雨が降ってきた。

時間的因果関係の場合は、行為的因果関係とは異なり、 $S_1$  の行為それ自体が  $S_2$  を引き起こしてはいない点である。つまり、(7) では「話し込む」という行為の結果「暗くなった」のではないし、「立ち話をし」た結果「雨が降ってきた」わけでもない。むしろ、「話し込む」、「立ち話をする」という行為によって時間が経過して  $S_2$  の状態 (「暗くなる」、「雨が降る」) という状態が生じたと考える。

行為的・時間的因果関係のいずれにしても、 $S_1$  の行為の進行中、継続中に  $S_2$  の事態が生じ、且つ変化していく。また、 $S_2$  の事態は  $S_1$  の行為の開始よりも遅れて発生している。逆に終了の時点を考えてみると、この並行型の場合、(5) の例文で「大阪弁を忘れてしまった」からといって、「東京に住んでいる」状態が終了するとは解釈されず、むしろ、忘れてしまったあとも、東京に住む状態は継続されると解釈できる。浅野は、「並行型の場合、大体において  $S_1$  はそのまま継続することが予測されるか、少なくとも「終わる」ということが明らかになっていない、という共通性を持つ」と述べている。

(2) 遮断型— $S_1$  の行為の継続・進行中に、その行為の結果として、これを遮断するような形で  $S_2$  が起り、新たな事態が展開することが予想される場合。

こちらも2つに分類される。

#### (a) 行為的因果関係

(9) 持ち歩いているうちに、なくしてしまった。

(10) 室内を物色しているうちに、防犯ベルが鳴り出した。

#### (b) 時間的因果関係

(11) 買おうかどうか迷っているうちに、売り切れてしまった。

(12) バスを待っているうちに、タクシーが来た。

これらの例文では、 $S_1$  の行為 (持ち歩く、室内を物色する) は  $S_2$  の生起によって中絶・中断する。並行型と違い、 $S_1$  の事態が中断してしまうと言うことは、「 $S_2$  が  $S_1$  より早く終了する」という最初の定義と矛盾するようであるが、「 $S_2$  が起こらなかったら、 $S_1$  は継続していたはずである」と考えると、浅野の言によれば「実現しなかった継続」とでも言うべき時間を含めて考えるとき許容できると述べている。

因果関係の重要性に関して、浅野は次の2文を比較することで述べようとしている。

(13) みんなで心配しているうちに、息子が家出してしまった。

(14) \*<sup>2</sup>みんなが心配しているうちに、息子が帰ってきた。

(13) が妥当な文であるのに対して、(14) の文が許容度が下がるのは  $S_1$  と  $S_2$  の間の因果関係が存在するかどうかにかかっている、と浅野は主張する。

わたし [浅野] の分析によれば、「みんなが心配している」という  $S_1$  の時間の経過のゆえに  $S_2$  が起こる、という因果関係が  $S_1$  と  $S_2$  の間に存在していなければならない。即ちみんなが心配していたものの、何も有効適切な処置を取らずに時間が経過して、その結果とうとう「息子が家出する」という事態を招いたのである。しかし「息子が帰ってきた」ということは、心配しつつ時間を過ごして結果ではないのであるからこの場合成立しない、と言えるのである<sup>3)</sup>。

(13) の場合には浅野は「時間の経過のゆえ」と述べているから時間的因果関係であると考えていると思われる。

(3) 制約型— $S_1$  の時間的制約の中に  $S_2$  の行為が開始し、且つ終了する場合。

$S_2$  が  $S_1$  より早く終了するという「うちに」の特徴がもっとも明瞭に現れている用法と考えられる。

(15) 子供が寝ているうちに、洗濯を済ませた。

(16) 田中さんが新聞を読んでいるうちに、食事の支度が出来た。

(17) まだ寝ているうちに、郵便屋が来た。

(18) まだ食べているうちに、皿を片づけられてしまった。

浅野の主張では、制約型は、 $S_1$  の終了する時刻を最終期限として  $S_2$  の行為を終わらせようとする発話者の意図が現れていることが多いと述べている。(15)、(16) はその意図

通りに  $S_2$  の行為が  $S_1$  の事態の継続中に終了できているが、(17)、(18)では  $S_2$  の行為が  $S_1$  の終了後に発生するであろうという「思い掛け」よりも早く起こってしまった、つまり発話者の意図に反した事態が生じてしまった、という解釈が与えられるとしている。

この制約型においても、因果関係が  $S_1$ 、 $S_2$  のあいだに存在すると浅野は述べている。即ち(15)、(16)では、「 $S_1$  の時間を意識してその範囲内に  $S_2$  を完了する、という意味で、つまり  $S_1$  の時間があるから  $S_2$  の行為をするという意味で、 $S_1$  と  $S_2$  の間に因果関係が存在する。」また、(17)、(18)では「 $S_2$  の早過ぎた生起によって  $S_1$  が遮断される、という意味で因果関係が成立している」と述べている。

## 2.2 Backhouse and Quackenbush (1975)<sup>4)</sup>

Backhouse and Quackenbush (1975) はまず「うちに」を特徴づける点として次の2点を挙げている(訳: 筆者)

(19) *Uchi* everywhere denotes a span of time. In  $S_1$  *uchi ni*  $S_2$  and  $S_1$  *uchi kara*  $S_2$  constructions, the action or event referred to in  $S_2$  occurs at some point of time during the state of affairs referred to in  $S_1$ .<sup>5)</sup>

「うち」はある時間の幅を示す。「 $S_1$  うちに  $S_2$ 」と「 $S_1$  うちから  $S_2$ 」の構文においては、 $S_2$  によって示される行為や事態は  $S_1$  によって示される状況の間のある時間の点において発生する。

(20) Additionally, *uchi* in certain cases presents a span of time as leading up to an end-point, at which the state of affairs referred to will cease to exist. In this sense, *uchi* is end-oriented; essentially, it presents a span of time from the point of view of contrast with what comes after it.<sup>6)</sup>

加えて、「うち」はある場合においては  $S_1$  で表現されている状況が終結点へ向かうものとしての時間の幅を示す。この意味では、「うち」は時間の幅の終端へ向かうものと解される。即ち、その時間の幅が終了したあとに何が来るのかとの対比の観点からその時間の幅を示すものである。

(20)の例として(21)を挙げている。

(21) 子供のうちは遊びたいだけ遊ばせなさい。

この「子供のうちは」は、人間の成長の全過程との対比で述べられているのではなく、その時期が終了したあとの「大人になる」という点との対比が強調されているし、またその終了を念頭に置いての発話であると考えられるわけである。

こうした考え方に基づいて、Backhouse and Quackenbush は「うち」構文を大きく2種類に分け、それぞれをさらに2つに下位分類している。

### (1) Constructions in which *uchi* denotes a span of time with end-orientation

(a) Before it's too late

(b) earlier than expected

### (2) Constructions in which *uchi* simply denotes a span of time without such clear end-orientation

(a) natural development in course of activity

(b) delaying too long

以下にそれぞれの下位分類について概説する。

#### (1) Constructions in which *uchi* denotes a span of time with end-orientation

時間の幅が終端へ向かっているという意識を「うち」が表すもの

(a) Before it's too late (手遅れになる前に)

(2) 雨が降らないうちに帰りましょう。

(b) earlier than expected (予期よりも早く)

(2) 使わないうちに悪くなっている。

#### (2) Constructions in which *uchi* simply denotes a span of time without such clear end-orientation

「うち」がただ単に時間の幅を示すのみで、それが終端へ向かっているという意識がないもの

(a) natural development in course of activity (行為の自然の展開)

(2) 考えているうちにだんだんわかってきた。

(b) delaying too long (遅延しすぎたこと)

(2) 歯医者に行かずにいるうちに歯を悪くしてしまった。

浅野(1975)では「因果関係」を必要な意味要素と主張していたが、Backhouse and Quackenbush は時間以外に、expectation (予期) をこの構文における必要な意味要素と考えている。(1a)のパターン(例文(22))では、好まざる事態の発展(「雨が降る」という事態への発展)を「予期」するがゆえの  $S_2$  の行為と捉える。(1b)のパターン(例文(23))では、「予期」に反した事態の推移が表現されている。(2a)、(2b)双方とも、時間の幅を示すのであるが、それが発話者の好む方向への推移(24)では「だんだんわかって」くる方向)なのか、好まざる方向への推移(25)では「歯を悪くする」という発話者にとっては好

まざる状況)なので区別できるとしている。

### 2.3 寺村 (1982)<sup>7)</sup>

寺村は「うちに」を「あいだに」や「まえに」との比較において論じている。彼は「うちに」を大きく2つに分類する。まず第1に、「 $S_1$ うちに $S_2$ 」は、ある時点( $S_1$ の事態が終了する時点)以前の $S_2$ という事態を問題にする点で、「 $S_1$ までに $S_2$ 」「 $S_1$ まで $S_2$ 」「 $S_1$ まえに $S_2$ 」と共通するが、 $S_1$ が時の幅を表す表現であるという性質によって「 $S_1$ あいだに $S_2$ 」「 $S_1$ あいだ $S_2$ 」と共通すると考えることができる。この「時の幅を表す表現」としては形容詞、継続動詞の「(て)いる」形、状態動詞、時の幅を指し得る名詞(朝、冬休みなど)があるとしている。

- (26) 明るいうちに峠を越えたいものだ。  
 (27) 若いうちによく勉強しておかないと後悔する。  
 (28) 赤ちゃんが寝ているうちにこの仕事を済ませてしまおう。

「うちに」と「あいだに」が異なる点として、「うちに」の場合、形容詞その他で表されている $S_1$ が「外」に対する「内」という見方で把握された時間の幅であり、いずれその時間の幅が終結して「その対立する時期に移行する、そういう未来のある時期と対立するものとして把握されたときの幅である」と述べている。これに対して「あいだに」の場合には、「対立」の概念が「うちに」よりも希薄であり、単に $S_1$ という時間の幅のどこかで $S_2$ が生起するという意味だけを有すると寺村は述べている<sup>8)</sup>。(27)にある「若いうちに」はその「若い」時期がいずれ終結し、「古い」というそれに対立する時期が訪れるということ念頭においていることが見て取れる。客観的に見れば状態の変化(若年から老年へ)は時の進行とともに連続的に起こるものであるが、それを主観的にある時点をいわば「境界線」のようにして2つの対立する時期と捕らえている。

(28)	$S_1$ (うち)	境界線	$S_1'$ (そと)
	若い	老いが始まる	老年
	明るい	暗くなる	暗い
	寝ている	目を覚ます	起きている

この対立する $S_1'$ の状態に移ったとき、 $S_2$ は「実現不可能か困難になるような事態であるか、または、そのような事態が起こるのが普通でないような事態である」という含みがあると寺村は述べている。そのため、(26)から(28)では、 $S_1$ が $S_1'$ へと境界線を越えるとき $S_2$ は出来なくなるのであるからそのために $S_2$ の行為を行おう、行うべきだ、などの情意的表現が出現する。

第2の分類として、寺村は以下のような例文を参照し

ている。

- (29) 初めはいやな奴だと思っていたが、付き合っているうちに彼の良さがわかってきた。  
 (30) ぐずぐずしているうちに彼女は結婚してしまった。

これらの例では、第1のものと違って $S_1$ の「付き合っている」「ぐずぐずしている」に対立する時期(「付き合わない」「ぐずぐずしない」)が捉えられているとは言い難いものとしている。寺村はこの説明として、

はじめは $S_2$ でない事態、いわばマイナス $S_2$ の事態であった、それが、 $S_1$ という事態が進行して徐々に、だんだん事情が思わぬ方向に発展してついに $S_2$ という事態になった、そういうことを表す表現……<sup>9)</sup>。

と述べている。ただし、寺村は厳密に2種類の「うちに」が存在するのではなく、 $S_1$ 、 $S_2$ の語形・語類によってどちらかに解釈されるのであって、全く違う意味を持つ「うちに」が存在するわけではない、としている。第1の形では $S_1$ に形容詞が生起するパターンが多く、動詞の「(て)いる」形は少数であり、 $S_2$ は情意表現が基本形である。それに対し、第2の形では、その正反対で動詞の「(て)いる」形がほとんどであり、情意表現よりは、客観的な事実報道の方が多いとしている。いずれの形にも共通なのは、「うちに」が、 $S_1$ 、 $S_2$ で表されている事態の他に、それと対立する事態を意味に含める役割を果たしている、という点であるとしている。

### 2.4 まとめ

本節では接続助詞「うちに」に関するいくつかの先行研究を概観したが、ここでそれらの問題点を指摘してみたいと思う。

浅野(1975)では、「うちに」で結ばれる2つの事態の間に因果関係が存在しなければならないと指摘しているが、因果関係の有り様はきわめて広範囲な要因によって決まるものであって、文脈に対する依存度が高いものと言えよう。因果関係の重要性の説明として、(13)、(14)の例文を提示していたが、

- (13) みんなで心配しているうちに、息子が家出してしまった。  
 (14) \*みんなで心配しているうちに、息子が帰ってきた。

(14)は2つの事態間に因果関係の読みが成立しないために不自然な文であると指摘しているが、文脈の設定次第で、適切な文として解釈することが可能になる。例えば、かなり特殊ではあるが、この息子が家出の常習犯であり、

頻繁に家からいなくなるので母親も最初は心配するがすぐに慣れっこになってしまっただけで心配しなくなった。その母親が他の子供の母親に向かって次のように愚痴をこぼすとしたらどうだろうか？「あなたのところはいいわよ、心配しているうちに息子が帰ってくるんだから。うちなんて心配したってどうにもならないし、忘れたころに帰ってくるのよ。」このように、文脈設定を工夫すれば、(14)は極めて自然、とまでは行かないまでも、容認できなくはないものになる。また、この場合、二つの事態の間に明確な因果関係があるのかどうか疑問である。

Backman and Quackenbush (1975) では「予期 (expectation)」をキーワードに説明を加えるが、

(24) 考えているうちにだんだんわかってきた。

この場合、「考える」という行為の自然かつ予期した展開として、その収束方向である「わかってくる」という状態へと到達すると述べているが、

(31) 考えているうちにだんだんわからなくなってきた。

という文も、(24)と優劣付け難いほどに自然なものである。この場合、「わからなくなる」は自然な展開でないと言うことが果たして可能かどうか？ もちろん、好まざる方向への推移ではあるが、(25)で見たような遅すぎた展開でもないわけで、この辺りの事柄についてさらに理論の精度を上げる必要があるように思われる。

寺村 (1985) は、次節で見るように「うち」のもつ基本的な空間の意味を時間の意味へ当てはめて考えているという点で、認知言語学的に見て評価できるものと考えられる。

### 3. 認知言語学

本節では、前節で先行研究を概観した「うちに」について、認知言語学の視点から説明を試みる。本節ではその説明の道具立てとなる認知言語学の視点を概観し、次節でそれに基づく「うちに」の分析を行う。

認知言語学とは、言語能力を人間の認知機構との関連で説明しようというものである<sup>10)</sup>。すなわち、人間は知覚を通して外界を把握するわけであるが、それは外界の存在を切り取って脳内に客観的に写し取るというのではなく、そこには主観的な解釈が関わっていると考える。そして、言語として表されている表現は客観的に存在する外界そのものではなく、そこには主観的な解釈が介在していて、その解釈によって複数存在する「外界の切り取り方」の中から一つを選び出しただけに過ぎないというのが認知言語学の基本姿勢である。

人間は外界の刺激を知覚し、経験するが、それらをすべて何の脈絡もなく記憶するのは脳の容量からして大変難しいものである。我々はこの知覚し、経験した事柄を効率的に記憶するために、知覚した事物の類似性・一般性を抽出することで事柄間にあるまとまりを認識していると考えられる。これを認知言語学ではカテゴリー化という。特にここで注目したいのは、この知覚したものの類似性を抽出するプロセスを認知言語学ではメタファーと呼ぶ点である。

「メタファー (metaphor)」というと、日本語では訳語として「隠喩」が当てられ、長く文体論での修辞表現として捉えられていたものであるが、ここで扱うのはそうした技巧的な表現ではなく、むしろ日常言語の中にすでに定着してしまい、メタファーであるという考えもなしに使われているような表現を取り上げる。

一例として、英語におけるコミュニケーションに関する表現を見てみよう。コミュニケーションは伝達したい事柄をいかに適切に効率よく相手に伝えるか、が重要となるが、こうした考え方の具体例として、英語では以下のような表現がある。

- (32) a. I will give you that idea.  
b. It's difficult to put my idea into words.  
c. Try to pack more thought into fewer words.  
d. His words carry little thing.

これらの表現では、伝達されるべき情報をものたとえ、それを言語といういわば「容器」に詰めて相手へ送り、相手がその内容物である情報を取り出すことでコミュニケーションが成立する、という解釈である。この極めて自然な英語表現においても以下のようなメタファーが考えられる

- (33) ・アイディア (あるいは意味) は物体である。  
・言語表現は容器である。  
・言語伝達は「送る」ことである。

このように、ある領域での理解 («ものを送る」という空間的意味解釈) を別の領域 (コミュニケーションという社会的な意味解釈) に移し替え、理解することを「メタファー的写像 (metaphorical mapping)」と呼び、移し替える元の領域 (source domain) と写像される先の領域 (target domain) とが存在する。我々が抽象的な概念形成を行う際にも、このメタファー的写像は重要な役割を果たし、より基本的で具体的な知覚・経験を source domain とし、それを抽象的な概念へと移し替えることで理解しているわけである。いま見た例でも、「空間」の

知覚というもっとも基本的な領域から、コミュニケーションという抽象的社会的領域へと写像されていると見ることが出来る。

この「基本的で具体的な知覚・経験」という考えを突き詰めていくと、そのもっとも根源的な経験というのは、我々人間にとってはその身体の構造に基盤をおく知覚・経験ではないだろうか。この根源的経験とは、体の上・下、内・外、中心・周辺、平行、平衡など、これらの区別無しには生活していくことが不可能とさえ思われるものである。こうした経験を積み重ねることによって抽出した抽象的概念（「上」「下」「内」「外」など）をイメージスキーマ (image schema) と呼んでいる。こうした身体にその基盤をおく概念は普遍性を持つ認知構造と捉える。例えば、英語の前置詞 in では、

- (34) a. The pencil is in the box.  
b. My friend is in that building.

のように 'box'、'building' という空間の中に 'pencil'、'my friend' がそれぞれ存在している、つまり一般化すれば「何かの中に何かがある」という漠然とした表象を頭に思い浮かべることが出来る。これは身体基盤的な「内」「外」の概念を土台にして得られた抽象的概念 (イメージスキーマ) の一つと考えることが出来る。(34)ではこのイメージスキーマを基本的な空間領域に当てはめたわけであるが、このスキーマを保持しつつ他の領域での事例にも当てはめて考えることが出来る。

- (35) a. My sister is in high school.  
b. My brother and Mary are in love.

(35a)では社会的領域で、(35b)では感情的領域で、それぞれこの「何かの中に何かがある」というイメージスキーマが生かされている例である。

#### 4. 「うちに」の認知言語学による分析

本稿で問題として取り上げている「うちに」を前節で概観した認知言語学の観点から分析してみるとどのような説明が与えられるだろうか。「うちに」という表現は、「内」という空間概念を基本的意味に持っていると言える。そしてこの「うち (内)」という概念は、我々が自分たちの身体を基盤として知覚・経験したことを積み上げて形成されたイメージスキーマ（「何かの中に何かがある」や、身体の外側・内側の区別から得られたもの）と規定している。「うち (内)」を認知言語学的にイメージスキーマで解釈すると、基本的には外周を境界線で区切られた空間で、「そと (外)」との間に境界線が必要となる。これを時間に拡張した場合にも境界線 (時間的なあ

る区切り)が必要になるはずである。さらに、「内」という概念は、「外」との対比無しには成立しないものである、という点は、寺村が指摘しているが、これもイメージスキーマによって説明することが可能であろう。例えば<sup>11)</sup>、我々がある陸地を「島」である、と知覚するときには、近視眼的にその陸地の部分だけを視野に入れるだけでは、その陸地が本当に島なのか、陸続きになっていないか、判断がつかない。「島」であると判断するためには、その陸地が360度水で囲まれており、かつその水面がある程度の広さを持つという程度にまで視野を広げなければならない。「内」も、ある領域の外周に囲みがあり、その外側が「外」と知覚されるだけの広がりを持つものと認知されて初めて「内」ということが知覚される。このような空間の知覚の仕方 (あるいは空間の切り取り方) を時間に応用する場合、「ある程度の時間の範囲の中 ( $S_1$ ) に、もう一つの時間の範囲あるいは時点 ( $S_2$ ) を内包する」という図式になっており、かつ  $S_1$  で表される時間の範囲の外側もある程度知覚しなければいけない、という制約があるように思われる。

また、この「ある程度の時間の範囲の中 ( $S_1$ ) に、もう一つの時間の範囲あるいは時点 ( $S_2$ ) を内包する」と規定するとき、 $S_1$ 、 $S_2$  という事態 (event) と空間上の領域や点とが写像の関係にある。つまり、空間を source domain とし、時間を target domain とするメタファーがここに介在しているわけである。

それでは、「うちに」の持つイメージスキーマや、 $S_1$ 、 $S_2$  の事態のメタファー的写像に基づいて、具体的に「うちに」の構文の特徴・生起する際の制約を見ていくことにしよう。

##### 4.1 $S_1$ に関する制約

まず、 $S_1$ は内部にもう一つの事態 ( $S_2$ ) を包含出来るだけの時間の長さをもつ事態でなければならない。

- (36) a. 金利が安いうちに金を借りた。  
b. 子供が寝ているうちに買い物を済ませた。  
c. 学生のうちに勉強しておけ。

(36a)は形容詞を用いて、(36b)は動詞の「(て) いる」形を用いて、そして(36c)は時間幅を想起させる名詞を用いて、 $S_2$ の事態(「金を借りる」「買い物を済ませる」「勉強しておく」)がその時間内に発生している例である。逆に、時間幅が想起できないような  $S_1$ はどうなるだろうか。

- (37) 一瞬のうちに山が崩れた。

「一瞬」は何らかの事態を包含するだけの時間を持たないものなので、一見(37)は反例のように見えるが、この場合の「一瞬」は、文字通りの「瞬間」の意味ではなく、む

しろ、 $S_2$ で表されている状態変化の速さを強調しているのであって、「一瞬」とは言いつつもある程度の時間幅が存在するものと解釈できる。また、4節の冒頭で「内」を知覚するためには「外」との対比が必要であると述べたが、「外」を知覚できない、即ち、いつまで時間が経過しても「内」を解釈された事態が変化しないような場合も非文と見なされる。

- (38) \*祖父が死んでいるうちにその遺産を親族で分配した。

この場合、祖父が死亡している状態はさらに変化することは考えられないので、この文を「祖父の死後その遺産を分配した」とは解釈できない。むしろ、(38)の文が発話されるのを聞くと、祖父が生き返るかのように解釈してしまう。つまり、発話時の「死んでいる」状態（「うち」と解釈される事態）が終了し、それとは対立する事態（「生き返り」）を有り得ない事柄であるにもかかわらず想起してしまうと考えられる。

2節で触れた寺村の「形容詞その他で表されている $S_1$ が「外」に対する「内」という見方で把握された時間の幅であり、いずれその時間の幅が終結してその対立する時期に移行する、そういう未来のある時期と対立するものとして把握されたときの幅である」という主張は、認知言語学的に見れば「うち」のイメージスキーマに由来するものと言えるだろう。

#### 4.2 「うちに」の多義性について

2節でみたように、例えば浅野の分析によれば「うちに」は大きく3つに分類されていたが、このようないわば「多義性」を認知言語学の観点から説明づけるには、今度は $S_2$ の性質に目を向ける必要があると思われる。 $S_2$ は $S_1$ の事態の生じている、あるいはその状態が継続している時間の幅に包含されなければならない点はすでに述べたが、この包含のされ方がいくつかに分類できる。

第1に、 $S_2$ で表される事態が完全に（言い換えれば、その事態の始まりから終わりまで） $S_1$ に包含されている場合が考えられる。これが「うちに」構文のいわばプロトタイプと言えるだろう。浅野の言う「制約型」にあたる。

- (39) 子供が寝ているうちに買い物に行った。

この文では、「子供が寝ている」状態が継続している間に発話者が買い物に行き、かつ戻ってきた、と解釈される。

- (40) 子供が寝ている  
[<.....>]  
[<.....>]  
買い物に行く

第2の種類として、 $S_2$ の事態が $S_1$ で示されている時間の範囲内に開始されるものの、その終了は含まれないものがある。すなわち、 $S_2$ はその事態の開始の時点を表すものなどが考えられる。

- (40(=7)) 話し込んでいるうちに暗くなってきた。

この文では、 $S_1$ の「話し込む」という行為の継続中に日が沈み辺りが暗くなってきたことを示すが、 $S_1$ の行為が終了した後も暗くなるという状態変化は進行する。

- (41) 話し込んでいる  
[<.....>]  
[..... [・] .....>]  
(暗くなり始め) 発話時 日が沈みきった  
状態

(39)の文と異なるのは、 $S_2$ の終了時点が $S_1$ の事態の終了時点よりも後でもよい点である。つまり、 $S_2$ の事態の任意の時点が発話時となり、その時点が $S_1$ の時間の幅に包含されていけばよいということになる。

ここでの第1の分類では $S_2$ が $S_1$ に完全に包含されてい、第2の分類では $S_2$ の全体が包含されてはならず、部分的に包含関係にあるものであった。つまり、 $S_2$ が徐々に $S_1$ の時間幅からはみ出る方向へと意味が拡張していつている。この拡張がどこまで進めるのかを考えてみた場合、 $S_2$ が $S_1$ に包含されないところにまで意味拡張が可能なかどうか、が問題となる。第3の分類は、この拡張の到達点、浅野の分類で言う「遮断型」に相当するものと考えられる。

- (42) バスを待っているうちにタクシーが来た。

この場合、タクシーが来たことによってバスを待つという行為は終了するわけであるから、2つの事態が包含関係にないように見える。ただし、次の文は非文である。

- (43) \*バスを待っているうちにタクシーに乗った。

バスを待つという行為が完全に終了するのは、バスを待つのをあきらめてタクシーを呼び止め、それに乗り込む時点であると考え、ただ単に「タクシーが来た」だけでは待つ行為の終了にはならない、と捉えれば、(42)の $S_2$ はかろうじて $S_1$ の範囲内にあると考えることが出来るだろう。

- (44) バスを待っている  
[<.....>]  
[.....>(・)]  
タクシーが来た (タクシーに乗る)

では、完全に  $S_1$ 、 $S_2$  が重なり合わないパターンは有り得るのだろうか。

(45) 本を読んでいるうちに眠ってしまった。

この発話者の状況を外部から客観的に観察すれば、本を読む行為と眠る行為は決して両立できない。本を読む行為が意図に反して終了し、眠るという行為へ移行したのであるから、 $S_2$  の行為は  $S_1$  と隣接することはあっても  $S_1$  に内包されることはないと考えられる。

(46) 本を読んでいる  
[<……………>]  
[<……………>  
眠っている

このように考えると、「うち」というイメージスキーマが保持されなくなってしまうわけであるから、(46) はイメージスキーマを基本にしたこの構文の分析に対する反例となってしまう。

しかし、発話者の観点からこの文を考えてみると、現象としては(46)のような状態の推移になっているとしても、発話者の意識の中では「読んでいる」と「眠っている」との間の境界線は明確なものではないように思われる。また覚醒している状態から眠ってしまうまでの状態変化は時間的に幅がある（個人差や状況に応じて、ということがあるにせよ）ものであるし、実際(45)のような場合、本を読んでいるが浅く眠りに落ちたりまた目覚めたり、という状態の繰り返しのうちに完全に眠ってしまうということがよく考えられる場合であるので、発話者の意識としては(47)のようにとらえているのかもしれない。

(47) 本を読んでいる  
[<……………>]  
[<……………>  
眠ってしまう

このように考えると、 $S_2$  が部分的にせよ  $S_1$  に包含されていると解釈できないこともない。そう考えるにしても、 $S_1$ 、 $S_2$  の「重なり具合」、あるいは「包含されている度合い」は非常に少なく、(47)の図式ほどには重なっておらず、 $S_1$  という領域の境界線の線上でわずかにかする程度に包含されているのかもしれない。その境界線というのも人間の意識下におけるものであるため、極めて漠然と不明確なものであるのかもしれない。

## 5. おわりに

本稿では、日本語の接続助詞「うちに」に関して、ま

ず先行研究のいくつかを概観し、それに対して認知言語学の観点からはどのような分析が可能なのかを探ってみた。「うちに」という接続助詞のもつ「内」（そして、言外に推定される「外」）のイメージスキーマと、この接続助詞によって接続される2つの事態のメタファー的写像によって本来の空間の意味から時間の意味へと拡張されたものであり、時間の意味においても、空間の「内」のスキーマ（片方が他方に包含されている）が保持されていると考えることが出来る。

認知言語学では、言語が脳内の他の領域とは独立して単独の1つの自律的なモジュールを形成するという生成文法の考え方に対して、言語が人間の知覚に大きく依存するものであり、知覚された事柄、外界の知覚の仕方等が言語表現に大きな影響を与えるものであると主張している。本稿での「うちに」の構文も、「内」という空間認知を反映したものであるということが出来るだろう。日本語では空間の位置関係を時間の関係へと適用したものが少なくない。「あいだ」、「すき（隙）」、「そば」、「あたり」、「なか」、「まえ」、「あと」などが思い浮かぶが、本稿での分析方法がこれらのものにも適用可能であるかどうかを精査していかなければならず、今後の研究の課題となる。特に「あいだ」は、時間の意味で用いる場合、「うちに」と大変意味の似通ったものとなるので、この2つを明確に区別することが認知言語学的に可能なように理論を構築していかなければならない。また、日本語以外の言語との比較研究も必要である<sup>12)</sup>。それによって、人類に普遍的なイメージスキーマを探ることもとなり、認知言語学の貢献に大いに資するものがあると考えられる。

\* 本稿執筆にあたり、東京農工大学の篠原和子氏、東北大学大学院の金容澤氏、ジョージタウン大学大学院の高田麻里氏より貴重な意見を賜った。ここに厚く謝意を表す。

## 註

- 1) 浅野百合子、「うちに」「あいだに」「まに」をめぐって」（『日本語研究』第27号、1975年、pp. 53-62
- 2) 例文の文法性（容認度）の判断は文頭の印で表す。\*は文法的に適切でない非文を示す。ただし、この文が文法的に不適切であるという判断は浅野によるものであり、以下に述べるように文脈の設定の仕方によっては適切と解釈することも可能である。
- 3) 浅野、前掲書、p. 56.
- 4) A. E. Backhouse and H. C. Quackenbush, "Aspects of *uchi* constructions", *Papers in Japanese Linguistics* 6 (1979), pp. 51-86.
- 5) Ibid. p. 61-2.
- 6) Ibid. p. 62.
- 7) 寺村秀夫、「時間的限定の意味と文法的機能」、『副用語の研究』

(明治書院、1982)。『寺村秀夫論文集。』(くろしお出版、1992年)に所収、pp. 142-7.

- 8) ㉓から㉔の例文で「うちに」のかわりに「あいだに」を用いても「対立」の意味合いは出てくるように解釈可能だが、 $S_2$ のモダリティが何らかの役割を果たしているように思われる。 $S_1$ を過去時制にして確定した事実と解釈し、未来へむけて対立する事態を想起できないようにすると、「うちに」の許容度は下がる。
- (a) 日本にいたあいだに富士山に5回のぼった。  
 (b) \*日本にいたうちに富士山に5回のぼった。
- 9) Ibid. p. 146.
- 10) 以下の議論は、川上誓作編著、『認知言語学の基礎』(東京：研究社出版、1996)に基づく。
- 11) この例は Ronald W. Langacker, *Concept, Image and Symbol*

(Berlin: Mouton de Gruyter, 1991), p. 8より引用したものである。

- 12) 例えば英語の場合、「うちに」に相当する接続詞は while が考えられるが、これは元々空間を表す意味がないので比較対照とはならない。むしろ、前置詞 in は空間・時間両方の意味で用いられる点で注目すべきと考える。

(i) This store will close in ten minutes.

この場合、閉店時間はこの発話の10分後と解釈される。10分という時間の幅の中の任意なある時点で閉店するのではなく、10分の領域の終わりの方の境界線に近いところか、あるいは境界線上と解釈される点で日本語の「本を読んでいるうちに眠ってしまった」などと類似点があるように思われる。